

# うじがみ遺跡ニュース vol.2

長野県埋蔵文化財センター

## ◆ 8名の精鋭も加わって

4月半ばから、発掘作業員さんも参加して、本格的に調査を開始しました。現場では、朝日村山鳥場遺跡やまどりばや辰野町沢尻東原遺跡さわじりひがしはらの調査に参加したベテランの方も、初めて発掘を経験する方と共に和気あいあいと取り組んでいます。まずは、調査範囲の壁削り。遺跡の地形形成過程を調べるため、土層断面を精査しています。



## ◆ 氏神遺跡の地形

氏神遺跡くさりがわは、鎖川うちやまざわに向かって北へ流れる内山沢のりくらがつくった谷の左岸段丘上にあります。

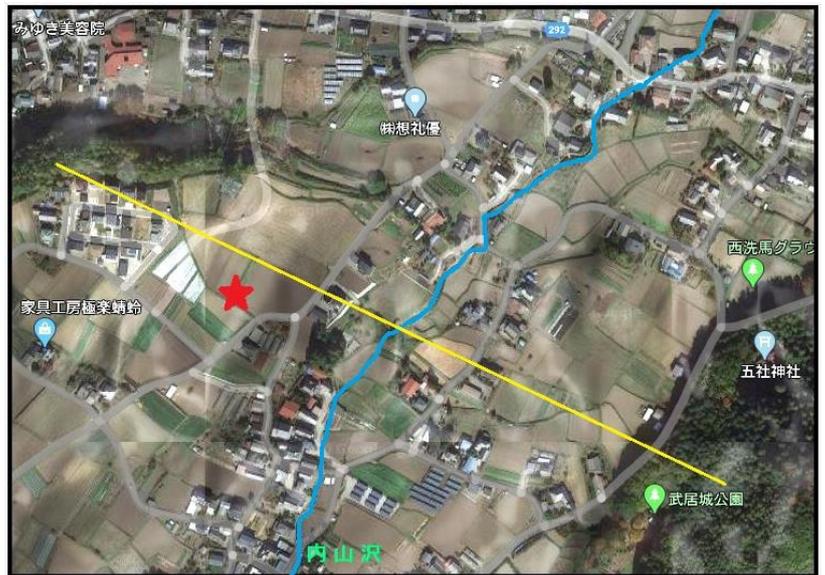
段丘の地下には、この地域の基盤となる砂岩や泥岩がたい積していると思われませんが、その上には、乗鞍火山帯を起源とするローム層が厚くのっています。全体に東へ緩やかな傾斜があり、陽当たりはとても良いところです。まさに「向陽台」という名前どおりの場所ですね。

内山沢の両岸の氾濫原はんらんげん（断面図の濃い茶色部分）では、水田が営まれています。一方、段丘上（断面図の薄い茶色部分）は、水の便に恵まれないため、畑作に利用されています。

『朝日村誌』によると、一帯は江戸時代から養蚕ようさんが盛んだったとのこと。当時は、桑くわの木がたくさん植えられていたのでしょね。

ウラ面の地層写真を見ると、最近まで長イモをつくっていたことがわかります。

安全第一！健康第一！



遺跡(星印)周辺の航空写真(Google Map)



航空写真の黄線部分の断面模式図

## ◆ 土の中の落としもの

氏神遺跡が立地する段丘には、まず黄色っぽい粘土質のローム層(5層)がたい積し、その上に茶褐色土(4層)と黒褐色土(3層)がのり、最後に暗褐色の耕作土(1層と2層)がかぶっています。これらの土は、母材になる石の風化度合いによって砂っぽかったり、粘土っぽかったりしますが、生物の分解物などが混じり、色にも違いができます。

最下層のロームがどの火山の噴出物によって形成されたかは、まだわかりません。乗鞍火山帯の中で比較的新しい火口は、乗鞍高原高天原・権現池辺りの 9200 年前くらい(奥野ほか 1995・1996)だそうです。ここでは約 10000 年前と考えておきます。

4層は、ローム層をまき込みながら腐食した土で、なかから、縄文時代中ごろ(約 5500~5000 年前)の土器が出土しました。そのうえの3層は、有機物がたくさん混じって黒くなっています。ここからは、平安時代の土器(約 1100 年前)がみつかりました。

どうやら、この場所にやってきた縄文人や古代人は、4層や3層がたい積するころ、土器のかけらを落としていってくれたようです。かれらは、それぞれの時代に、ここでいったいなにをしていたのでしょうか。それをこれからの発掘で探っていくことにします。



最近出版された「地学でめぐる 信濃三十三番札所」という本です。当センターの長谷川主任調査研究員は、本書の執筆者のひとりです。

氏神遺跡周辺の地形・地質について、地学の専門家である長谷川主任にもいずれ調査してもらおうと考えています。

ご支援とご協力をお願いいたします！



1 奥野 充ほか 1994「乗鞍岳火山，位ヶ原テフラ層直下の炭化木片の加速器 14C 年代」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』no.10  
奥野 充ほか 1995「乗鞍岳火山，位ヶ原テフラ層の 14C 年代」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』no.11

うじがみ遺跡ニュース 第2号 (令和2年4月27日発行)

長野県埋蔵文化財センター 〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 HP: <http://naganomaibun.or.jp/> Email: info@naganomaibun.or.jp

発掘現場: 080-9560-1354 (担当: 村井大海・平林 彰)